

コロナが教えてくれたこと

中 二

新型コロナウイルスが流行り始めて、二年が経つが、いまだにマスクを外す生活を送る日々が迎えられるくない。最近では、どのような感染症対策をすれば、コロナウイルスに感染しないか、みんな理解している。しかし、コロナウイルスが流行り始めた最初の頃は、どのように防げばいいのか、毎日毎日ニュースで新しい情報が流され、そのたびに不安になり、振り回されていた。

そんな頃に、私の母は、コロナ病棟の看護師として働くことになった。最初その話を母から聞いたとき、私は泣いてしまった。どうして私の母なのか、感染してしまったらどうしよう、死んでしまうのではないか、私も感染してしまうのではないかと不安と恐怖でいっぱいだった。家族みんなが反対したが、母はそれでも、

「自分はコロナ病棟で働く。」
と言いつつ、働き続けた。

ニュースでは、「医療従事者は家に帰れずに車

の中で生活している」とか「看護師の子供は保育園で預かってもらえない」「学校や習い事に来ないでほしい」などの差別があることが報道されていた。また、母も病院の中でさえ、

「廊下ですれ違う時に距離を置かれたり、エレベーターに乗ってこようとした人が私の顔を見て乗るのをやめたりされた。」

と悲しそうに話していた。感染した患者さんのために一生懸命に働き、闘っている母に対して、医療従事者の中でもそんな差別があることを、私も悲しく思った。同時に、自分も学校で周りの友達に母がコロナ病棟で働いていることが知られてしまったら、みんなに避けられてしまうのではないかと、誰にも言えなかつた。

母は毎日ぐったりして帰ってきた。いつ自分も感染するか分からない恐怖と不安の中、患者さんのために常に気を張りながら働いているからだと思つた。そんな母を近くで見ていると、私も一緒に闘いたくなつた。コロナと闘う看護師さんを応援したくなつた。

感謝の気持ちと応援していることを伝えたくて、私は母が働くコロナ病棟の看護師さんたちに手紙

を書いた。手紙を読んだ母は、

「ありがとう。」

と言って泣いていた。病棟の看護師さんたちからも「こちらこそ、ありがとう」「手紙のおかげで元気が出た」「また明日から頑張れる」との返事がもらえた。

その返事を読んで、母たちがこんなに不安や恐怖を感じ、さらに差別を受けながらも使命感をもって働いているのに、私は「友達にばれて仲間外れにされたらどうしよう」とか「母がコロナ病棟で働くのをやめてほしい」と自分の心の中でコロナ差別をしていたことに気付かされた。

今は、コロナ病棟で働く母を誇りに思っている。そして、私も将来は母と同じ看護師になり、困っている人に手を差し伸べられる、寄り添える人になりたい。母は今でも私の書いた手紙のコピーを大事に持っていてくれてる。コピーしたのも、病棟に掲示されているそう。自分のちよっとした行動が、人の力になることを実感した。